

〔書評〕

井上博嗣著

『古代語における程度副詞』

本書は、著者が勤務する京都女子大学国文学会発行の『女子大國文』を中心に、二十七年にわたって書き継がれた、古代語の「程度」表現に関する既発表論文一八篇をまとめたものである。まとめるに際し、「改めて書き直して」と思つて試みてはみたが、一つの論文の改稿に一年近くを要してしまい、「改稿を諦めたよしが「あとがき」にある。そのため、「ほぼ発表した論文のまま」、主題別に章立てされた論文集になっているが、内容的に対象領域の輪郭は極めて明瞭な論文集である。書名には、その対象領域が「程度副詞」の名で限定されているが、本書のそれは、いわゆる程度副詞のみではなく、「程度副詞」を中心とする「程度」表現の諸形式・諸相であると言つてよい。本書は、古代語のそういう領域について著者が営々と開拓してきた成果をまとめた研究書であり、そういう性質の研究書として、もちろん最初のものである。

一 本書の構成

まず、本書の章立てから紹介する。本書は全十六章で構成されている。各章の見出しは、次に示す通りである。

第一章 程度副詞の「程度」

- 第二章 極度・高度を示すもの
- 第三章 低度の程度を示すもの
- 第四章 数量の多さを示すものの程度表現
- 第五章 形容詞の程度表現
- 第六章 比較的程度を示すもの

第一章は、本書の書名に照らして、全体の総論にも擬しうる題になっているが、特にそれを意図して書かれたものではない。末尾に付された「各章・節と論文」によれば、第一章は昭和五十三年、「女子大國文」八三号に発表された論文であり、その題目がそのまま本書の章名に採用されているわけである。ただし、もとの論文には「――上代の、助詞「まで」と高度の程度を示す副詞より――」という副題が付されていた。その「高度の程度を示す副詞」を取り上げている点では、第二章の内容とも関連する点の多いものである。

第二章以下の各章は、その章名からもうかがえるように、程度の高低・数量性・程度の捉え方などの別によって立てられており、いづれも二節以上、五節までに分かれている。そして、その節の大部分が、既発表論文一篇をもって当てられている。

頁数を調べてみると、第一章が二三頁、第二章が一四二頁、第三

章が八〇頁、第四章が四〇頁、第五章が六九頁、第六章が七九頁である。頁数の上では、第二章が大きい比重を占めていることが判る。五節までに分かれているのも、第二章だけである。そこで、次に第二章を一例に、その各節の見出しと、そのもの論文題目・発表誌名などを紹介してみよう。もとの論文題目の方が、各節の見出しよりはるかに具体的で、その内容も想像しやすい点があると思うからである。

第二章 極度・高度を示すもの

第一節 「いや」

古代語における数量と程度——
「いや・いよ・いよいよ」の場合——
〔女子大国文〕九五号）

第二節 「いと」①

中古の程度副詞について——いとの場合——
〔国語国文〕三六卷一〇号）

第三節 「いと」②

古代語の程度副詞「いと」の二種の「程度」の意味とその諸相〔女子大国文〕八七号）

第四節 「いと」十係助詞

中古の程度副詞について——いとと十係助詞の場合——〔女子大国文〕五七号）

第五節 「いと」と

古代語「あな」と「いと」と〔女子大国文〕一一三号）

一つの章に配された論文数の多さで第二章に次ぐのは、第六章である。そこでは、論文四篇によって、次に示すような四つの節が立てられている。その各節の見出しだけでも、著者の関心の広がり、ある程度うかがうことができよう。

第六章 比較的程度を示すもの

第一節 格助詞「より」によるもの

第二節 「まさりて」「けに」

第三節 「まして」

第四節 「いとど」・「いとどし」

すでに紹介したが、第五章には「形容詞の程度表現」の章があり、著者は形容詞による「程度」表現についても、丹念な調査をしている。ここでは、否定の形容詞「なし」との複合形も多く取り上げられており、全六章の中では、もっとも語彙的な多様性を示すものになっている。本書のそういう一面も示す意味で、次にその各節とその下位小節についても紹介しておく。

第五章 形容詞の程度表現

第一節 そのものごとが二つと他にないとの意味のもの

- (1) 「たぐひなし」 (2) 「たとしへなし」 (3) 「たとへむかたなし」 (4) 「になし」 (5) 「ふたつなし」 (6) 「またなし」 (7) 「よになし」 (8) 「ありがたし」

第二節 限界・際限がないとの意味のもの

- (1) 「かぎりなし」 (2) 「きはなし」 (3) 「きはまりなし」

第三節 他との異なりやそのもの十全性を意味するもの

- (1) 「けし」 (2) 「またし」 (3) 「こよなし」

第四節 言いようがない・為しようがない・為ても仕方がないと

言った意味のもの

- (1) 「いはむ方なし」 (2) 「いふかぎりなし」 (3) 「いふかたなし」 (4) 「いふかひなし」 (5) 「いふはかりなし」 (6) 「せむかたなし」

二 著者の研究法

副詞という品詞は、意味的な多様性に富むと同時に、他品詞との関連も密であり、機能的に流動性の高い品詞である。そういう品詞性から言つて、副詞の部分体系としての自己完結度は、相対的に極めて低いと考えられる。情態副詞の中でも、現実の模写性をその特徴とする擬声語・擬態語のように、意味的な具体性の強いものにさえ、他の一般概念語との間には、かなりの交渉が構造的に認められるくらいである。まして、より抽象的な「程度副詞」を中心とする「程度」表現となると、関係する形式の範囲も一層広くなるし、その扱ひも当然いわゆる語彙的な処理だけでは済まない点が多くなる。他の語との相関性や共起性によってその働きの微妙に揺れやすく、場合によって陳述副詞への連続性なども考える必要が出てくる。それだけ構文論との関わりもおのずから濃くなるを得ないのである。そういう事情が、個別の語の意味・用法やその変遷を探るだけの語史的研究ならまだしも、過去の共時態を対象にして、その程度表現の全体像を探るような企てには、一般に二の足を踏ませてきたと言つてよいだろう。その意味で極めて未開拓な分野を、著者の井上氏は長年まことに辛抱強く耕してこられたのである。

著者の問題意識には、「程度」表現に多少とも関連する古代語(上代・中古語)の諸形式が、どのように「程度」表現に関わっているか、その実態を資料に即して形式ごとに個別に明らかにしようとする志向が強いが、また、それを通じて「程度」表現における「程度副詞」とその周辺諸形式の連関する原理を明らかにしようという志向もあつて、その両者がどうも分かちがたく共存しているように見える。前者を著者の第一志向、後者を第二志向と仮に呼ばせてもらえば、その第一志向は、たとえば「古事記・日本書記・風土記・万葉集・古代歌謡集(いずれも日本古典文学大系)」を資料としている(第一章)という類の依拠資料の明示が、しばしば、論文の冒頭でなされていたり、これこれの作品にはその例がないといったことまで諸所に断られていたりする点にも、その一端をうかがうことができ

る。

もし著者がこの第一志向だけでこの種の領域にかかわつたとすれば、程度副詞に属する語彙を作品別に列挙したり、たまたま、興味を覚えた一部の程度副詞を取り上げるくらいで、こういう研究領域からもつと早く手を引いていたかもしれない。「あとがき」によれば、「中古の程度副詞について——いとの場合」というのが著者の大学卒業論文の題目であつた。その「程度副詞」を中心に、こうして本書をまとめられたのであるから、この研究領域は、著者にとつてまさに一筋の道と言うべきであるが、その著者にして、「妙なことからこの世界に迷い込んだ人間の妙な思ひもたらすところ」などと、謙辞とも述懐とも取れる言葉を「あとがき」に漏らしている。いかに厄介な研究領域だったかということである。だが、それにもかかわらず、この領域が著者を捉えて離さなかつたのは、著者の内面に第一志向と分かちがたく共存した第二志向あつたのことに言わなければならない。本書が古代語の「程度」表現をめぐつて、これだけのまとまりを得たのは、その意味で著者の第二志向に負う度合いが高いと言つてよいだろう。

第一章の題が、全体の総論にも擬しうるものになつてゐることは

すでに触れたが、それだけに第一章は、著者の第二志向が比較的明瞭に読み取れる章でもある。「程度副詞の『程度』」というその章名からもうかがえるように、この章は「程度」の意味に三つの段階を区別し、「程度副詞」の「程度」性を明らかにしようとしている。しかし、その段階を区別するためにも、特定の時代・資料における個別語の実態分析を離れて、最初から演繹的に著者の「程度」論を展開するようなことはしない。一方で、上代語における「ほと」と「まで」の用法や、高度の程度を示す諸副詞の用法の実態分析をめざし、あくまでそれと抱き合わせに、程度副詞の「程度」も論じられるのである。

著者によれば、まず「ほと」に認められる「程度」性は、
妹が門いや遠そきぬ筑波山隠れぬほと(保刀)に袖ば振りてな
(万葉・三三八九)

のように、たんに「時間・距離・様態のはば」のみを限り量る第一次段階の「程度」であるが、一方、「まで」のそれには、

秋田刈る仮庵の宿のにはふまで(及)咲ける秋萩見れど飽かぬ
かも(万葉・二二〇〇)へ本書三頁には「秋萩」の「秋」が脱字
になつてゐる。

のように、「〜までそれほどに(多く・一面に)」とそのはばをさらに「どのくらい」と「二重的に」量る面があるとして、第一次段階のそれから、第二次段階の「程度」が区別される。しかし、その第二次段階の「程度」には、第一次段階のそれもお両立することに注意し、その両立性を第二次段階の「程度」の特徴と見なすことによって、その両立性が絶たれた「純粹に『程度』を示す」段階をさらに区別し、それを「第三次段階の『程度』と呼ぶことにするので

ある。

この章でも、一方では上代語の高度の程度を示す副詞の実態を検討し、「いたく」「いた」「いと(とⅡ甲類)」「あやに」などは、第二次段階の程度を示すもの、「いと(とⅡ乙類)」「いとのかきて」「いたりて」「きはめて」などは、第三次段階の程度を示すものといった分析もしており、それと併せて「程度」のありように三段階が区別できるといふ見解や、「程度副詞」の「程度」は、「第二・第三次段階のものを、一括して称されている」といった見解を述べるのである。

しかし、著者の第一志向による実態把握の試みと、第二志向のもとに「程度」の段階性やその連関性を原理的に探る試みとは、常にそうたやすく並行させられるとは限らない。強いてそうしようとするれば、どこかで無理をしたり、綻びを生じたりすることにもなりかねまい。第一章の場合も、「ほと」と「まで」という特定の語の用法の分析から、程度副詞の程度性の違いに言及していく論理の必然性はどうも判りにくい。「ほと」と「まで」の差によつて、第一次段階と第二次段階の「程度」の違いが説かれるまでは、まだ実態分析と「程度」論とが一応並行しているが、第三次段階の「程度」のありようについては、そこだけ現代語の例で説明されていたりするから、全体としてその二つの試みがうまく噛み合っているとは、言いがたないように思われる。しかし、著者みずからその章末尾に、「以上は、上代における高度を示す程度副詞論でもある……」と総括して見ることこそ、著者のこの領域に取り組み基本的な態度と見るべきものようである。

本書に収められた諸論文における調査・考察の対象が、いわゆる

程度副詞とその周辺の諸形式を含めた、「程度」表現であることはすでに述べた。その「程度」表現に対する著者の研究方法には、語彙的な関心よりも、語法的な関心が強く、さらに言えば意味を中心とする表現的な関心が強いと思われる。結果的に多様な語について言及しているのは事実だが、著者の関心は語彙よりも文法的な意味に向けられていると言えよう。第一章でも副助詞「まで」と「高度の程度を示す副詞」とを、併せて論じていた。同様に「比較的程度」の表現形式を対象とした第六章でも、まず第一節に「格助詞「より」」を取り上げ、続いて「まさりて」以下の副詞を取り上げている。副詞と助詞とをこのように関連づけて見ていくのも、著者の関心が文法的な意味に向けられていることの端的な現れと言えよう。このことは、著者がその出発点から、森重敏『日本文法通論』の所説に学ぶところがあつたらしいこととかなり関わるもののように思われる。

三 本書の論述

このように助詞や形容詞などとの連関性に加えて、副詞内部の「程度」性、「数量」性・「陳述」性などのありようを探ろうとする著者の関心は、いきおい各語の語義を越えて、それが他の語・成分と相関する文脈における、具体的・表現的な意味のありように注がれる。語の働きの微妙な違いや揺れを探ろうとする以上、方向においてやむをえない方法ではあるが、その分、逆に当該形式の語義と、その文脈によって決まる意味との区別などは、軽視されがちになっている点がある。

著者はそういう具体的なありように注目することによって、同じ

語の時代差や、類義語間の微妙な用法の差を明らかにしていこうとする。たとえば、「比較的程度」の表現形式を取り上げている第六章第二節に、次のような指摘がある。

比較の対象が「に」より「より」で示されることは先述のように「まさりて」の状態の意味の徹底であり、副詞化への徹底である。その徹底において、比較の三類型（個と個との、個とその属する類一般との、同一物の異なる場合の比較）に用いられるに至ったことは、「比較の対象を越えるさま」の意味の完結とも言えることである。

用例の広がり方を調べる一つの基準として、著者はここにいう「比較の三類型」に当たる例の有無を確かめるのであるが、その「三類型」というのも、「程度」表現に関わる語の、むしろ語義を越えた、具体的な表現上の類型である。そういうものを手がかりに、副詞周辺の「程度」表現の形式についても、その副詞化の「徹底」度とか、副詞内部の「程度」性を量ることを分析の主眼としている。しかし、右の場合も、「比較の対象が「に」より「より」で示されること」「副詞化への徹底」であるとと言われる意味や、「その徹底において、比較の三類型（……）に用いられるに至った」と言われる事柄同士の関係などには、今一つ判然としない印象が残る。しかし、そういう印象を与える論述の多くは、実態として迎れる史的実実を指摘している部分ではなく、著者の第二志向に基づく諸形式の時代差や表現史的な連関原理の把握に関わる部分に偏るように思われる。

「比較の三類型」のすべてに対応する用法の広がり認められるようになることを理由に、著者は上代と中古の実態をつないで次のような指摘をしている。

「比較の対象を越えるさま」を意味する語は、上代の「まさりて」に始まり、中古の「まさりて」で一応の完結をみ、「けに」で完全に完結するという展開をみる。

しかし、散文資料の著しく中古に偏る古代語で、上代から中古に至る「程度」表現の時代差を捉えようとするのであれば、上代の資料が和歌のそれに偏ることによる、文体差の制約にも注意し、慎重な判定が望まれて当然であるが、そういう点に関する著者の判断は、あまり慎重とは思えない。ただし、そういう性急さも、どちらかと言えば、実態分析自体におけるそれであるより、先述の通り著者がその実態分析にとかく並行させようとする原理的把握にめだつ傾向である。右に引用した部分の「完結」という語の用語法などにも、十分な概念の吟味を経ているとは思えないところがある。これも著者の第二志向の強うかがえる論述部分に顔を出す用語法である。

本書に収められた論文は、古代語の「程度」表現に関わるものばかりであった。一般論としては、そういうものをまとめる場合、総論・序論、ないしは、結論に当たる種類の章が、巻頭または巻末に据えられてよいところである。そういう形で全体を総括する論述が何ら本書に示されないままになっているのは、やはり残念である。

といっても、先に述べた副詞という品詞の、部分体系としての自己完結度の低さや、すでに見てきた本書の「程度」表現の広がりから言えば、助詞や助動詞の類の共時論に期待されるような体系的なまとめが容易にできるとは考えにくい。あまりきつちりした体系化をめざすこと自体、もともと馴染まない点だが、こういう研究領域にはありそうにも思われる。しかし、それにしても、すでに触れた著者なりの方法論を語るなど、何らかの総括めいたものが欲しいと思う

のは、評者ばかりではないだろう。あるいは、すでに触れた著者の内面に分かちがたく絡み合う二つの志向が、そういう総括部を用意することまでも、妨げたのであろうか。

こうして多数の論文が一書にまとめられると、他の章・節に配された論述と互いに関連する箇所も当然多くなってくる。そういう箇所が互いに参照できるように、巻末に主要な語句の索引を用意したりすることも、結局見送られたようであるが、その点だけはやはり惜しい気がする次第である。妄言多謝。

(平成六年三月三十一日発行 清文堂出版刊 A5判 四三六頁
一〇八一五頁)

——大阪大学教授——

(平成六年十二月二十九日 受理)